



Title	スタインベックの『罐詰横町』 存在の悲哀の研究
Author(s)	辻, 武男
Citation	長崎大学教育学部人文科学研究報告, 35, pp.63-73; 1986
Issue Date	1986-03
URL	http://hdl.handle.net/10069/32952
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-19T02:57:08Z

スタインベックの『罐詰横町』

—— 存在の悲哀の研究 ——

辻 武 男

Steinbeck's *Cannery Row* : A Study of the Sadness of Being

Takeo TSUJI

(一)

リスカによれば、『罐詰横町』は6週間で完成した。ある新聞社の戦争特派員として赴いたヨーロッパ戦線から1943年の10月に帰国した後、スタインベックは戦場で見たものを発表する予定だったが、その現実に余りに失望したので発表しないことに決めた。その代わりに新しい小説つまり『罐詰横町』に取り組み、1944年の3月に完成した¹⁾。

『罐詰横町』は6週間で完成したが、キアナンによれば、『トーティーヤ台地』(1935)を出版して間もなくパシフィック・グローヴを訪れた編集者パスカル・コヴィチをスタインベックはその小説の舞台に連れて行き、モンテレーの罐詰横町を案内して廻ったそうだが、これ以後コヴィチはスタインベックに『トーティーヤ台地』風に罐詰横町に関する小説を書くことを勧めたと言う²⁾。従って『罐詰横町』の構想は作者の心の中で数年間、温められていたことになる。

スタインベックが『罐詰横町』を書くに当ってはコヴィチの勧め以外にも理由があった。

◀私は特派員として戦争を見た。そしてその後、『罐詰横町』を書いた。これは言わば郷愁的な作品であり、「戦争については面白おかしいものを書いてくれ。俺達が読むようなものを書いてくれ—俺達は戦争にうんざりしている。」と私に書いてよこした兵士達のグループのために書かれた。³⁾▶

従って、『罐詰横町』は「戦争からの息抜き」⁴⁾としても読めるし、事実あの高名な批評家エドモンド・ウィルソンは、この小説を評論して、「スタインベックの本の中で、『罐詰横町』は最も楽しんで読んだ作品である」⁵⁾と告白したのである。

マルカム・カウリーは『罐詰横町』を「毒入りのシュークリーム」⁶⁾であるかもしれないと評したが、スタインベックはそれを聞き、「カウリーがそれをもう一度読んだら、それがいかに猛毒がはいっているか気がついたろう。」⁷⁾と答えた。リスカは、この小説についての作者自身の評価が場合によって異なっていることを指摘しているが⁸⁾、現在までのスタインベック研究の成果から考えると、作者の意図は多元的、多面的であったことは間違い

ない。そしてこの小説の一面は極めて深刻で悲劇的でした。[毒入りのシュークリーム]のシュークリームに相当するものが、この小説のユーモアと喜劇性であり、「毒入り」に該当するのはアメリカの資本主義倫理の生み出す文明の諸悪である。作者の批評眼は文明の諸悪の根源に向けられ、それらを厳しく批判した。「その基本的諸価値がそれ〔世界〕を次々に厳しい経済的不況の11年から世界大戦の巨大な侵略と破壊へと突入させた」⁹⁾世界を糾弾したのである。その際、そのような世界を批判する規準となった思想的基盤は、リスカの炯眼が読みとった東洋の老子の思想だった¹⁰⁾。人為を排し「無為自然」を善しとする老子の思想は物質主義に毒された文明への痛烈な風刺となりえた。しかし老子の思想は今日なお読者の心をとらえているとは言え、スタインベックの終生変らぬ強力な武器とはなりえなかったのである。彼は30年代の汎神論的立場から、このように一時期老子の思想（これは彼の親友の海洋生物学者であるエド・リケッツの影響らしいが）を経て、その後キリスト教的傾向へ赴いたのである。スタインベックには宇宙が絶えず拡大しているという知識があったが、急激に変化する世界、精神と物質・肉体が跛行的に変動する世界にあっては、老子の「無為自然」が生きる原理となりえなかったのは当然と言えよう。確かに、『罐詰横町』の次に発表された『真珠』では物質主義の否定を作者は声高らかに唱え、『気まぐれバス』ではアメリカ社会の断面を剔抉しその偽善と欺瞞を断罪した。しかし、この二つの作品にあっては老子の思想はもはや反定立とはなりえていない。私達は、スタインベックの思想的遍歴の振幅の大きさ・激しさにただ驚くばかりである。そして『罐詰横町』を読む時、その世界とそこに住むエキセントリックな人々の喜劇的な姿と行動に共感を覚えつつ、そこで繰り上げられるドラマに「存在の悲哀」を感じずにはいられないのだ。スタインベックがショーペンハウアーの著『意志と表象としての世界』を読んでいたことは『疑わしき戦い』の主人公がこの思想家に言及することに窺われる¹¹⁾が、『罐詰横町』が読者に与える悲哀感にはショーペンハウアーの苦悩に極めて近かったように思える。エド・リケッツは『罐詰横町』を「孤独についてのエッセイ」¹²⁾と呼んだが、リケッツの「孤独」をもっと包括的にこの小説の世界に合致する言葉で言い換えれば、「存在の悲哀」ということになりはしないか。

(二)

ショーペンハウアーは人間の存在状況について次のような認識を表明している。

◀四方八方果てしなく、聳えてはまた砕ける怒濤の咆哮する荒れ騒ぐ大海で、か弱い乗り物ながらそれをたよりとしてはしけの上ですわっている舟人のように、人間はひとりひとり、もろもろの苦悩に満ちあふれた世界のまっただなかに、個体化の原理すなわち個人がもろもろの事物を現象として認識する仕方をささえとし、たよりとしながら、安らかにすわっているのである。限りのない過去にわたり、限りのない未来にわたり、いたるところで苦しみに満ちあふれた果てしのない世界などというものは、彼にとっては無縁のものである。¹³⁾▶

しかし、スタインベックにとっては、この苦悩そのものである世界は決して無縁なもの

ではなかった。またこの「個体化の原理」は常に私達を苦悩や悲哀から守ってくれる訳ではない。戦争でも起きれば、どんなに無事な人間と言えども、その渦中に巻き込まれ「戦慄」¹⁴⁾を体験せざるをえないのだ。スタインベックも大戦で戦慄すべき体験をした。そしてその体験は彼の世界観・人間観まで変えた。その変化が何かといえば、キリスト教的な罪の意識である。『罐詰横町』には原罪からの人類の救済を模索した『エデンの東』と共通の認識が早くもみとめられる。例えば、この作品の主要な登場人物で食料雑貨店を営む中国人リー・チョンは「恐らく彼は善と悪の間で均衡をとり、善により宙吊りにされていた一老子の牽引力により軌道につながれ、算盤とレジの遠心性によって老子から引き離されているアジアの惑星」¹⁵⁾と説明される。スタインベックは創世記のカインに相当する人物、『エデンの東』のキャルについて「キャルは私の子供である。彼は万人 (the Everyman) であり、善と悪の間の戦場であり、あらゆるものの中で最も人間的で、想い悩む人である。」⁶⁾と述べている。人間は常に悪へと転落する危険にさらされているのであり、ショーペンハウアーの言う「個体化の原理」により苦悩と悲哀からあやうく守られているにすぎない。『罐詰横町』の冒頭は懐古的な調子で始まる。

《カリフォルニア州のモンテレーの罐詰横町は詩であり、悪臭であり、耳障りな騒音であり、ある種の光であり、色調であり、習慣であり、郷愁であり、夢である。¹⁷⁾》

スタインベックにとって、罐詰横町とは過去へと退いてゆく夢であり、郷愁をさそう世界であったに相違ない。この後作者は横町の住人について次のように述べる。

《そこの住人達は、かつてその男が言ったように、「売春婦であり、ポン引きであり、賭博師であり、何処かの馬の骨」であった。そう言うことにより彼は万人を意味した。もし男が別ののぞき穴から見たら、彼は「聖者と天使と殉教者と信心家」だと言ったことだろう。それでも彼は同じ事を意味したであろう。¹⁸⁾》

スタインベックは、私達が普通抱く人間観を180度反転させ、後で触れることになる、所謂「倫理的逆説」への布石をしく。

『罐詰横町』は全体で32章からなり、本章と中間章がほぼ交互になるように構成されている。本章は「その理由を知っている、あるいは知っている筈のエド・リケッツに捧ぐ」と献呈の辞が与えられているリケッツをモデルとした人物「先生」のために横町の浮浪人たちが計画する二つのパーティが軸になっている。中間章はエピソード風で「宇宙的モンテレー」と言う具合に現実のモンテレーを普遍化したり、罐詰横町の世界とその雰囲気を描いたりする役割を果たしている。このように『罐詰横町』のプロットは単純であるが、そこに描かれている知のパラダイムは途方もなく巨大である。『罐詰横町』は発表された時は「調子を別にすれば、すべて『トーティーヤ台地』の繰返しにすぎない。」¹⁹⁾と酷評されたが、スタインベックの小説の中では難解な部類にはいる作品と言えるだろう。

『罐詰横町』の住人は「先生」にせよマックを首領とする浮浪人達にせよモデルがあったが、現実そのものではない。第二章に当る中間章には次のような記述がある。

〈言葉は人々や光景、木々、植物、工場、そして北京人を吸いあげる象徴であり、喜びである。その時「物」(the Thing)は「言葉」となり、それから再び「物」へと戻る。しかし歪められ、そして夢のような模様へと織りこまれる。「言葉」は罐詰横町を吸い上げ、消化し、そして吐き出す。すると横町は緑の世界と空を映し出す海の微光を帯びる。20)〉

これは言葉により現実を虚構に変える過程を作者が説明したもののだが、同様にマック達もリー・チョン同様普遍化され理想化される。

〈マックと男達もまた彼らの軌道で回転している。彼らはあわただしく、めちゃくちゃなモンテレーの天使である。21)〉

そして作者は現実の世界とマック達の世界の相違をユーモアを交え誇張して概括する。

〈潰瘍を患った虎により支配され、狭窄病に罹った雄牛がわだちをつけ、盲目のジャッカルがごみあさりをする世界にあって、マックと男達は虎と上品に食事をし、取り乱した若い雌牛をなでまわし、罐詰横町の海鷗たちに餌をやるためにパンくずを包む。胃潰瘍を患い前立腺肥大に罹り、遠近両用眼鏡をかける羽目になって全世界を手に入れ、財産を作ったとしても、それが人間に何の利益を与えるのだろうか。マックと男達はこの罠をさけ、毒物の回りを歩き、輪繩を跨ぐのだ。22)〉

マック達の世界は「自然にましますわれらが父」のもとでの他者との共生の歓喜に含まれた場所で、略奪と破壊が充満する現実の世界と本質的に異なっている。このような価値観の転倒は、「熊の旗」料理店という名の売春宿の女将ドーラ・フラッドと女達にも同様に窺える。この売春宿は非合法であるにもかかわらず、「上品で清潔で誠実で、誰でも友達と一緒に一杯のビールを飲むことができる」店なのであり、決して暴利をむさぼるキャバレーではない。ドーラは博愛家で弱者の味方であり、警察や商業会議所、赤十字、共同募金、ボーイ・スカウトとあらゆることに寄付をする。またドーラは『怒りのぶどう』のジョード一家を支えるマ・ジョードと同様に賢く逞しい女傑である。スタインベック自身が売春という制度を是認している訳ではなく、偏見や固定観念で人間を判断しないことの証左と理解してよいだろう。このように偏見や固定観念にとらわれぬ態度はこの作品の主人公の「先生」に典型的に表われている。エド・リケッツがモデルである「先生」は、例えば善と悪といった既成概念にとらわれず、物事をありのまま見ようとする、所謂「非目的論的思考」の持主であり、罐詰横町の住人のよき助言者であり、「哲学や科学や芸術の源」として理想的な人物として描かれている。「先生はいかなる類の無意味な言葉にも耳を傾け、それを他人の為にある種の英知に変えてしまうのだった。彼の精神には限界がなかった—それに彼の同情心にはいかなる歪みもなかった。」²³⁾「先生」を知っている者は誰でも彼に借りがあった。「先生」のことを考える者は皆、次に「俺は本当に先生のために何か良いことをしなければならぬ」と考える。このように「先生」は罐詰横町の誰からも愛され敬われ

ていた。しかし「先生」は独身なのであり、また研究に携わるがゆえに、孤独な存在だった。作者は「先生」の顔が「なかばキリストであり、なかばサチュロス」であると説明することも忘れない。「先生」は「兎のように好色」なのであり、決して異性が不必要な訳ではないのだ。時には「先生」が経営する「西部生物実験所」の窓にカーテンが引かれ音楽が流される時、女性が訪れているのだ。精神そのものであるキリストと自然の示す生殖力の象徴であるサチュロスという人間の両極性に分離されている「先生」は「私は自由人だ」²⁴⁾と言うにもかかわらず、孤独から自由な存在ではない。この孤独な「先生」のためにマック達はびっくりパーティを計画するのである。一度は惨憺たる失敗に終り、次はディオニュソス的な歓喜を実現するパーティの意味は「先生」が二度目のパーティの時、そして翌朝ひとりで読むインドの古い詩『黒いキンセンカ』の「人生の熱きあじわいを味わう」という言葉に集約できる。この詩は今ほさにしひとを偲ぶ恋愛詩であり、青春を思索で過ごす生き方を称える詩である。しかし、この詩は妙に物悲しい。この作品で朗読される『黒いキンセンカ』の最後の連は次のとおりである。

今でもまだ

私は知っている、大いなる宴で緑盃と黄金の盃をもたげ

人生の熱きあじわいを味わったのを。

ただ束の間の忘れ去りにし時を求める私の眼に

さりにしひとからの永劫の光がいと白く

ゆたかに射しこむのだ。²⁵⁾

「先生」自身、この詩を朗読した後、臉を手の甲で拭くのであり、後は檻の中を無心にかけ廻る白ネズミと虚空を見つめるガラガラ蛇の描写で終るこの作品は最高の悲哀感を読者に与える。パスカル・コヴィチは『罐詰横町』を読み返して次のような手紙をスタインバックに書き送った。

「私は『罐詰横町』を読み返した。良い本だよ、ジョン。あなたはそこへ沢山の詩をそそぎ込んだ。生きることと死ぬことの原因をかなり沢山書きこんでいる。そして、あなたが生まれたことを私は嬉しく思うし、あなたが生きていることを幸福だと思う。確かに人生は偶然事だ。人間は、蟻がサハラ砂漠にとって重要でないように、大宇宙からみれば重要でない。しかし私達はお互いにとって重要なのだ—私達はお互いのイメージの中で誕生するのだよ。²⁶⁾」

名編集者コヴィチは『罐詰横町』の中に「生きることと死ぬことの原因」を鋭く看取した。人間が「お互いにとって重要」なのは、「人生の熱きあじわい」を分かち合うという事に外ならない。さもなければ人生は墓場のように荒涼としたものとなる。スタインバックは「生きることの原因」と同時に「死ぬことの原因」もこの作品で書いた。

(三)

『罐詰横町』にはパーティに代表される人生の光の部分と対照的に、死に代表される人生の影の部分が色濃く描かれている。リー・チョンの魅力ある褐色の眼は内部の「おだやかで永遠の中国人の悲しみ」²⁷⁾に向けられていたし、「人間が自殺する権利は犯すべからざるものであるということはリーが親切で理解があることを深く示すものであった」²⁸⁾のである。

ホレイス・アベヴィルという名の人生に想い悩む紳士がいた。この紳士は細君がふたりと6人の子持ちだったが、リーの食料雑貨店にモンテレーで誰にも劣らぬ程の負債があった。ホレイスは借金を帳消しにするため、魚粉を置いている家をリーに譲り、その後魚粉の山の上で自殺するのだ。リーには「助けようにもどうしようもなかったろう」という事が分かった。ホレイスが自殺した理由のひとつは人間としての「威厳」²⁹⁾を守るためであった。

ドーラの「熊の旗」料理店のアルフィーが今の用心棒の仕事を引き受ける前にも皆を悲しませる悲劇が起きた。前の用心棒ウィリアムの事である。彼は色黒で淋し気な男だった。仕事がない昼間など店の女達の存在にうんざりしていた。店の窓からマック達が空地のパイプに坐り、のんびりと話をしているのを見て、ウィリアムは彼らに加わりたと思う。ある日、彼が歩いて行きパイプに坐ると会話はびたりと止み、不安と敵意のある沈黙が訪れる。マックは、ただ単にウィリアムが好きになれなかったのだが、彼が「俺はポン引きは嫌いだ」と言うのを聞いて、ウィリアムは失意する。色黒く醜い顔をし、内向的でいつも自分を責めてばかりいるウィリアムは孤独だった。「この浮浪人たちは社会的に彼を受け入れてくれなかった。」³⁰⁾誰も彼を愛してくれなかったし誰も彼のことを気にかけてくれなかったのである。マックはウィリアムがポン引きだから嫌ったのではなかったが、ウィリアムはそう思いこむ。彼は自分を「汚らしいポン引き、この世の中で最も卑しいもの」と思いこみ、氷割りのきりで自殺するのだ。ウィリアムも他の誰とも同じように幸福に生きる権利があると思ったにもかかわらず、料理人のギリシア人に「そんな事を話す奴は決してそういうことはしないものと聞いてるぜ」と言われて、氷割りのきりを胸に突き刺したのだ。『罐詰横町』で老子の思想を体現するマック達でさえウィリアムを仲間にすることができなかったのである。スタインベックが考えている差別の構造はまことに根深いものと言わざるをえない。

死は『罐詰横町』の中で作者のファンタジーとしても描かれている。

夕方、丁度黄昏時、奇妙な事が罐詰横町で起きる。この時刻になると決まって年老いた中国人が丘を下りて、ホレイス・アベヴィルの家で今はマック達が住む「安宿御殿」を通りすぎ空地を横切り棧橋の間に消える。人々はこの中国人のはがれてパタパタッという靴底の音を寝ながら聞く。ある人々はこの中国人を神だと考え、非常に年老いた人達は死だと考え、子供達はとてもおかしい支那の老人だと考える。しかし子供達はこの老人を嘲ったり、囃したたりしなかった。というのはこの老人は躰に小さな恐怖の雲をかかえていたからである。サリーナスから来たアンディという10歳になる勇敢な少年がこの老人をからかった。すると老人の両目は大きくなり、それから一つ目となり、「教会のドアほど

も大きく」なった。少年がそのドアから中を見ると数マイルに亘り平たく広がり奇怪な山脈に行きつく淋しい田舎の風景が見えたのである。「その淋しさーその風景の人氣がなく冷たいわびしさがアンディを泣かせた」³¹⁾とある。この老中国人は死の孤独を象徴するのであろう。

「西部生物実験所」へやって来る、11歳になるフランキーという低能な少年の話もまことに悲しい。フランキーは何も覚えることができないがゆえに学校にも置いてもらえない。脳の働きがおかしいのである。少年の母親は（父親は死んでいるが）彼を施設に入れる金を出そうとしない。家には始終、伯父達がいてフランキーを殴る。「少年には居る場所がなかった。」³²⁾そのフランキーが「先生」の実験所へやって来るのだ。「先生」は少年の髪を切りしらみを駆除することからしてやらねばならない。人間を信じる「先生」は自分を好きだと言ってくれるフランキーに手仕事を教えようとするが、少年はザリガニを大小に分類することもできない。ある午後実験所でささやかなパーティが催される。フランキーは一杯のビールを急いで運び、ある女性に渡す。女性はグラスを受けとり「あら、ありがとう」と言う。「先生」も「そう、フランキーは私にとって大助りだ」と感謝する。恐らく生まれて初めてほめられたフランキーはこの言葉を忘れることができなかった。そして次のパーティの時フランキーは大失敗をやらかす。前のパーティの時と同じように、前と同じ女性にビールの盆を運んで行く。

◀そしてその時、丁度彼らの前で例の事が起った。頭脳が働かなかった。両手はもたつき、筋肉は恐怖に駆られ、神経は働かなくなった司令部に信号を送った。が、応答は返ってこなかった。盆とビールはその若い女性の膝へ崩れ落ちた。³³⁾▶

「少年に出来ることはこの世に何もなかった」のである。『天の牧場』の精薄児ツラレシートや『はつか鼠と人間』の薄のろの大男レニーの後継者であるフランキーの話は環境に適応できない弱者に対しスタインベックが深い同情と関心を一貫してもっていたことを物語っている。フランキーのような致命的な欠陥のある存在はこの世のすべてを受け入れようとする「先生」でも助けてやることはできない。それはマック達が「先生」のために催すパーティの直前に起きる事件で明らかとなる。フランキーは皆が「先生」のためにプレゼントを用意している話を聞く。すると胸が「先生」のために何かしたいという気持で一杯になるのだ。ヤコブ宝石店のショー・ウィンドウにはこの世で一番美しい品物があった。それは文字盤が金で出来た黒瑪瑙の時計である。が、その上についているものが本当に美しいのだった。それは悪龍を退治する聖ジョージのブロンズ像で、聖人はちょっと「先生」に似ていた。フランキーは夜人氣が絶えるのを待ってヤコブの店のガラスを割り時計を盗む。しかし警察官に追われ、袋小路に逃げこんだところでフランキーは逮捕される。翌朝警察から連絡を受けた「先生」は署へ赴く。するととても汚らしい姿のフランキーが連れてこられる。「どうしたんだい、フランキー」と尋ねる「先生」に署長は事情を説明する。「フランキー、君はそういう事をすべきでなかった」と言う「先生」の胸を「運命の不可避さという重たい石が押しつける。」³⁴⁾仮釈放を願う「先生」に署長は裁判官が許可しないだろうと言い、フランキーに関する精神鑑定書に言及する。そして署長は「この少年が思春期にはいったら何が起きそうか御存じでしょう」と言う。さらに署長は、医者がフランキー

を病院に入れたがいいと考えている旨「先生」に伝える。それに対し「先生」はなす術を知らない。「先生」がフランキーに盗んだ理由を尋ねると、少年は「先生が好きだからです」と答える。「先生」はそれを聞くとたまらなくなり駆けて署を出、車に飛び乗り採集に出掛ける。「先生」は善良な精薄児を救うことができなかったのである。この挿話は自然そのものが不完全で瑕疵があることを物語っているのであり、作者のセンチメンタリズムではない。

死は「先生」の採集地にもあらわれる。その日は大収穫だった。小蛸を22匹つかまえ、今では必要なものは殆ど採集できていた。「先生」は長い皮のような褐色の海藻が海水の中へ垂れ下っている堡礁の外側のところまでやって来る。汐が再び満ち始めた頃、堡礁の、海草におおわれた二つの岩の間の水面下に、「先生」は白くきらめくものを見る。すると漂う海草がそれを隠す。「先生」はその場所へと、すべすべした岩の上へと登って行く。そして躰をしっかりと構え、そっと手をのびし褐色の海草をかき分ける。

「するとその時彼の躰は硬直した。一人の少女の顔が彼を見上げていた。美しく青白い顔をした黒髪の少女だった。瞳は見開き、澄んでいた。そして顔は硬く髪は頭のまわりでやさしく海水で洗われていた。躰は見えず、岩の割れ目にはさまれていた。唇はすこしあき歯がのぞいていた。そしてその顔には慰めと安らぎがあるばかりだった。丁度水面下に顔はあり、澄んだ海水がそれをとても美しくしていた。「先生」にはその顔を何分間も見ているように思えた。そして少女の顔は彼の脳裏に焼きついた。³⁸⁾」

浜へと辿りついた「先生」の耳に音楽が鳴り響く。それは高く細い、胸をつん裂くように甘美なフルーツの音で、「先生」には思い出すことができないメロディーを伝えていた。そしてこのメロディーを背にして叩きつけるような、大波の如き木管楽器部が鳴り続ける。「先生」の両腕に鳥肌が立つ。「先生」はふるえ、眼は、素晴らしく美しいものの焦点に入った時そうなるようにうるんだ。少女の「瞳は灰色で口はすこし微笑んでいた、もしくは恍惚として固唾を呑んでいるように見えた」³⁹⁾とある。海で水死した美少女と音楽との結びつきという着想を作者がどこで手に入れたかは判然としないが、ひょっとしたらジョイスの『若い日の芸術家の肖像』の中でスティーヴン・ディグラスが現世の美の象徴と言うべき少女を浜辺で目撃する場面かもしれない³⁷⁾。あの場面での『肖像』の文体も極めて音楽的だった。スタインベックは『罐詰横町』の中でエキセントリックな画家アンリーを登場させており、その気になれば彼もジョイスのように「芸術家小説」を本格的に書くことができたであろう。しかしジョイスは芸術、スタインベックは実人生により関心があった。船を何度も造り直し海を恐れるアンリーは、芸術創造には携わるが現実に介入することは恐れる芸術家のパロディーかもしれない。ともかくスタインベックは「先生」を介し海で水死した少女と音楽を結びつけることにより、この作品の中で最高の抒情性と審美性を描くことができた。「存在の悲哀」が審美性により慰められる好例と言えるだろう。

ここで前に触れた所謂『倫理的逆説』について若干「存在の悲哀」との関係で考えてみたい。

「善と言え、私達はいつも英知、寛容、親切、寛大、謙虚さのことを考える。そし

て残酷、貪欲、利己心、強欲、そして略奪心は普遍的に望ましくないものと見做される。だがしかし、私達の社会の仕組の中では所謂善と考えられる諸特質はいつも決まって失敗に付随するものであり、他方悪の諸特質は成功の土台である。^{38)》}

上に引用した『コルテスの海』の言葉を『罐詰横町』の中で多少言い換えてはいるが、「先生」は繰り返して述べる。

《他の人間が野心と神経過敏と強欲とでわが身を引き裂いている時代に、あの連中はゆったりしている。われわれの所謂成功者なるもののすべてが病める者たちだ。胃を病んでおれば、魂も病んでいる。しかしマック達は健康で奇妙なほど汚れていない。あの連中はしたいことが出来る。欲求を満たすに当ってはそれを別の名で呼んだりしない。^{39)》}

「先生」によれば、マック達は「真の賢人」⁴⁰⁾であり、「マックには天才の性質が備わっている」⁴¹⁾のだが、マックが真の賢人でないのは次の引用で判然とする。最初のパーティが「先生」の実験所の破壊に終わった翌朝マックは「先生」に詫びて言う。

《「パーティが手に負えなくなった訳で」マックは言った。「済まねえと言ったところで何の役にもたたねえ。俺は生まれてこの方済まねえばかりなんだ。今に始まったことではねえ。いつだってこうなんだ。^{42)》}

再びジョイスを引き合いに出して言えば、マック達は、ジョイスの短篇集『ダブリン市民』の中の「二人の伊達男」の主人公レネハンとコーリーに相当する人物である。しかしジョイスとスタインベックが登場人物を取り扱う方法は截然と異なる。レネハンが冷やかに「寄生虫」⁴³⁾ (“a leach”)として描かれているのに対し、マック達は作者の生態学の知識と浪漫的な人間観から、罐詰横町という共同体の中で共生的存在として描かれている。彼我の違いは歴然としている。ジョイスの人間観の少なくとも半分を正しいとするなら、スタインベックの浪漫的な人間観もいくらかは修正されねばならない。したがってまたスタインベックの「倫理的逆説」もその分だけ修正されねばならない。マックの人生は失敗の連続だったし、彼らのディオニュソス的な共生的歓喜も恒常的ではありえず、また彼らの老後の倖せを約束してくれる訳ではないのだ。成功に終わった二度目のパーティですら「先生」の陰での協力があつたから実現したのだった。またスタインベックが主張するように、善なるものが常に失敗に結びつき、成功者が躰も魂も病んでいるとすれば、何処に希望をつなげばよいのか。悲しみを忘れるために猫を相手にパーティを開くトルボット夫人の挿話といい、父親が猫いらずをのみ自殺したジョウィー相手に断末魔の苦しみを味わうネズミの真似をしてからかうウィラードのブラック・ユーモアといい、一等地に住んでいたのに配偶者が見つからず、探しにいくと同じ雄から手痛い目にあう地リスの動物寓話といい、『罐詰横町』は読者に存在の悲哀を感じさせずにはおかない。

30年代の世界的不況から第二次世界大戦に突入した40年代のスタインベックの世界観・人間観にはショーペンハウアーのそれと「存在の苦悩」という点で同質のものがあつただ

ろう。それに妻との不和という個人的問題もあった。ただスタインベックは「存在の苦悩」をそのまま『罐詰横町』で描きはしなかった。作者は「戦争からの息抜き」という兵士達の声も聞き入れねばならなかった。スタインベックはその要望に最大限応えた。その結果「存在の苦悩」は「存在の悲哀」へと薄められ、エドモンド・ウィルソンですら正確には理解できない、一見喜劇的でその実、悲哀に満ちた作品が誕生したのである。

〔註〕

- 1) See Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck* (New York : Gordian Press, 1981), p. 197.
- 2) See Thomas Kiernan, *The Intricate Music : A Biography of John Steinbeck*, (Boston : Little, Brown and Company, 1979), p. 267.
- 3) Howard Levant, *The Novels of John Steinbeck : A Critical Study* (University of Missouri Press, 1974), p. 166.
- 4) Lisca, *The Wide World of John Steinbeck*, p. 198.
- 5), 6), 7), 8) *Ibid.*
- 9) Peter Lisca, *John Steinbeck : Nature and Myth* (New York : Thomas Y. Crowell Company, 1978), p. 112.
- 10) *Ibid.*, pp. 116-123.
- 11) See Steinbeck, *In Dubious Battle* (London : Heinemann, 1936), p. 7.
- 12) Lisca, *The Wide World of John Steinbeck*, p. 217.
- 13) ショーペンハウアー：『意志と表象としての世界』（斎藤忍随他訳）白水社，正編（II），pp.308-309.
- 14) *Ibid.*, p. 307.
- 15) Steinbeck, *Of Mice and Men/Cannery Row* (Penguin Books), p. 116.
- 16) Thomas Fensch, *Steinbeck and Covici : The Story of a Friendship* (Middleburg, Vermont : Paul S. Eriksson, 1979), p. 166.
- 17) *Cannery Row*, p. 117.
- 18) *Ibid.*
- 19) Woodburn O. Ross, "John Steinbeck : Earth and Star," in *Steinbeck and His Critics*, eds. E. W. Tedlock, Jr. and C. V. Wicker (Albuquerque : University of New Mexico Press, 1957), p. 177.
- 20) *Cannery Row*, p. 116.
- 21), 22) *Ibid.*, p. 117.
- 23) *Ibid.*, p. 128.
- 24) *Ibid.*, p. 225.
- 25) *Ibid.*, p. 269.
- 26) Fensch, p. 44.
- 27), 28), 29) *Cannery Row*, p. 112.
- 30) *Ibid.*, p. 120.
- 31) *Ibid.*, p. 124.
- 32) *Ibid.*, p. 153.
- 33) *Ibid.*, p. 155.
- 34) *Ibid.*, p. 250.
- 35), 36) *Ibid.*, p. 196.
- 37) Robert J. DeMott, *Steinbeck's Reading* (New York : Garland Publishing, Inc., 1984)の中にジョイ

スの *Ulysses* と *Finnegans Wake* の名が見える。

38) Steinbeck, *The Log from the Sea of Cortez* (Penguin Books), p. 98.

39), 40), 41) *Cannery Row*, p. 223.

42) *Ibid.*, p. 214.

43) James Joyce, *Dubliners* (Panther, 1977), p. 45.